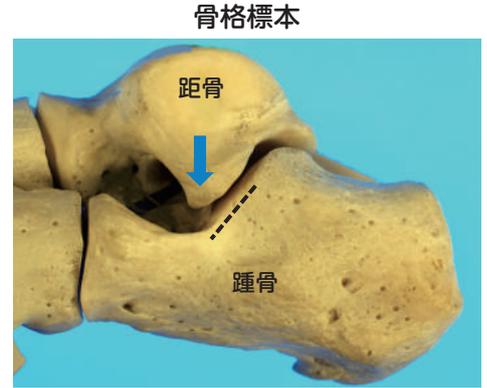


# 踵骨骨折

## 症状

### 踵骨骨折とは—

高所からの転落などで踵骨の主に距骨下関節が骨折した状態です。



→ 転落などで下方に外力がかかります ----- 距骨下関節面：外力をうけることとなります

### 症状

受傷時から踵全体のはれと痛みがあります。骨折時よりはれが増大してきてから痛みが増強することも少なくありません。皮下出血も認めます。踵での荷重は一般に困難になります。

### X線像：受傷時



距骨下関節が骨折して関節面が二分した状態です

----- 骨折がなければこの二つの面は一つの点線上に一致します

## 原因・病態

高所からの転落など、垂直方向の力が踵に加わることが原因とされます。関節面がずれるため関節に痛みを生じ、関節の動きも低下します。さらに骨折は関節面以外にもおよぶので、踵骨全体が変形し、足部に様々な痛みを引き起こします。

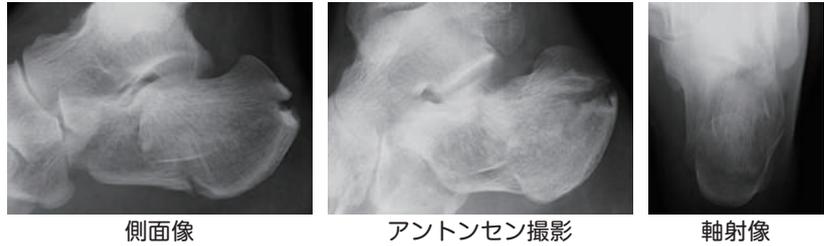


足部の腫脹、皮下出血、水泡が確認できます

# 診断

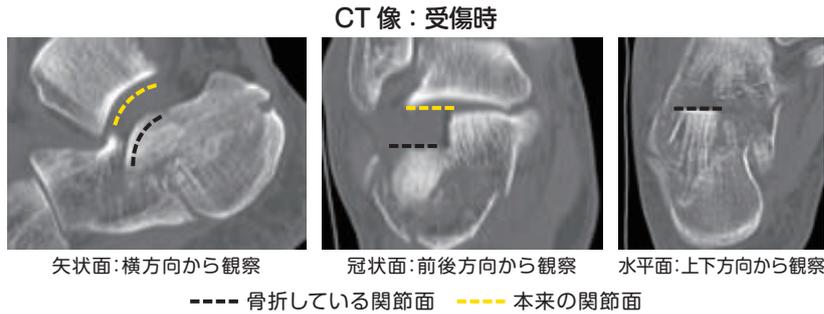
## ● 単純X線検査

多方向からの撮影により、骨折を確認します。関節面や全体の骨折を評価できます。



## ● CT検査

単純X線像で骨折部のずれが大きい場合は必要な検査です。3次元に関節面と踵骨全体の骨折がとらえられるので、手術方針の決定等に重要です。



# 治療

適切な治療により痛みや歩行困難を来さないようにする必要があります。

## 保存療法

骨折部のずれが少ない例は基本的に3～6週のギプス固定や装具療法が行われます。

## 手術療法

骨折部に大きなずれを認める場合は手術療法が推奨されます。骨折のずれの程度、年齢等に合わせた手術法を行います。



## 後遺症の治療

リハビリ終了の後に足部の変形や慢性の痛みが残った場合は、保存治療として薬物療法や装具療法(サポーターやインソール)、追加手術として踵骨骨切り術や距骨下関節固定術等が必要になる場合もあります。

## 後遺症の治療

